

機関研究 ● 「マテリアリティの人間学」領域 民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究  
—ロシア民族学博物館との国際共同研究 (2012-2014)

## 2つの国際ワークショップ

2013年9月23日から27日までと2014年3月3日から7日までの2回にわたって、機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究—ロシア民族学博物館との国際共同研究」によるワークショップを行った。この機関研究はロシア、サンクトペテルブルク市にあるロシア民族学博物館との協定に基づいて実施している国際共同研究である。2013年度はその2年目に当たり、主要なテーマを、収集した資料の情報をいかに的確に記録し、整理し、それを現代のデジタル技術に変換して保存、利用するかということとした。前年度には資料の保存と修復に関するワークショップを行ったが、この年度には収集される資料の情報化の諸問題を扱ったわけである。

2013年9月のワークショップは「博物館の民族学資料の記録化・情報化の諸問題」と題して、収集した資料の記録を作成することを中心に、その管理、利用方法についての検討を行った。場所はロシア、サンクトペテルブルク市のロシア民族学博物館であり、2日間の学術討論会の後、この町のもう1つの民族学博物館であるロシア科学アカデミー人類学民族学博物館、エルミターージュ美術館、そしてペテルブルクの近郊にあるノヴゴロド野外博物館とヴィトスラヴィツィ民俗木造建築博物館の視察を行った。2014年3月のワークショップは、「コンピュータとドキュメンテーション—民族学資料のデジタル化とその利用」として、作成した資料の記録やこれから作成する記録をいかにデジタルデータとして利用、共有を図るかという問題に焦点を当てた。こちらは主要な研究集会を

国立民族学博物館（以後「民博」とする）で行い、奈良国立博物館、元興寺文化財研究所、そして天理大学附属天理参考館で視察と討論会を行った。

## 民族学資料の記録化、情報化

民族学博物館によって収集される民族学資料（標本資料、映像音響資料など）は、次の2つの点で記録化され、保存される。1つは資料そのものの記録である。大きさ、重量、形態、材質、特記すべき特徴等であり、それらはテキスト、あるいは映像音響媒体で記録される。もう1つはその資料に関わる情報の記録化である。それには名称（現地名、翻訳名）、製作にかかわる情報（年代、場所、製作者、製作状況）、使用に関わる情報（年代、場所、使用者、使用状況）、他の関連資料との関係性などが含まれ、やはりテキストあるいは映像音響媒体で記録される。収集状況によってはこれらの情報をすべて確認することができるわけではなく、また保管状況によっては記録が散逸することもあり得る。しかし、資料に関する情報がどの程度充実しているのかは、博物館の評価に深く関係する。記録が付随しない資料は研究、展示などの利用に供することが難しく、その価値が大きく減ってしまうからである。

長い時間をへてコレクションを充実させてきている欧米の博物館ではこの種の記録が充実していることが多い。それに対して、民博は比較的短期間に大量の資料を収蔵したことが関係して、記録が充実していない資料が少なくない。

ロシア民族学博物館は100年以上の歴史を誇る古い博物館であり、100年以上前に収集された資料も多い。そのような

資料は収集当時の方針、方法、媒体によって記録化されている。それは資料の記録化に長い歴史と伝統を有しているとともに、記録化の問題に100年以上にわたって取り組んできたことも意味する。しかも、この博物館では記録の更新を何度か行っており、古い手書きの台帳からコンピュータ上のデータベースまでである。つまり、記録方法の更新と媒体の変換の経験も豊富である。今回のワークショップは、40年とまだ歴史の浅い民博が、そのような経験を



ロシア民族学博物館でのワークショップの風景（2013年9月25日）。

学ぶ絶好の機会だった。

また、今回のワークショップでは古都ノヴゴロド市にあるノヴゴロド野外博物館とヴィトスラヴィツィ民俗木造建築博物館という古いロシアの民俗建築を展示する野外博物館の協力を得て、家屋のような大型資料の収集、保存、修復、展示、記録化、そして博物館資料を利用した民俗文化の再現などの諸問題も検討した。

このワークショップで得られた最大の成果は、博物館資料の記録化、情報化を推進するには、収集や研究に従事する館員（研究者や学芸員）の意識向上が非常に重要であることを改めて認識させられたことである。ロシア民族学博物館にせよ、ノヴゴロドの両博物館にせよ、収集者あるいは研究者は収集時に必ず資料台帳への必要項目の記入が義務づけられている。それらはむろん日付と署名が入った記録であり、博物館業務の一環として館員に対する評価の対象となる。どのような形式で、どのような媒体に記録するのもか大事なことはあるが、まず収集した資料に関する記録を残すということがいかに重要なことなのかを改めて認識させられた。

### 民族学資料のデジタル化の問題点

民博は博物館データのデジタル化と研究へのコンピュータの利用に先進的に取り組んできた。すなわち、発足当初（1970年代）から収集、収蔵した資料の記録化、情報化の作業にコンピュータが活用されてきた。しかし、それゆえに古いソフトやハードにとらわれて、1990年代に入ると、逆にめまぐるしく変化する機器や技術の発展についていけなくなってしまった面が見られた。この問題をいかに克服し、常に最先端の技術を使って資料の整理と利用を可能にするのが民博にとっての課題だった。

それと同時に、博物館が扱う情報を僅か数年、あるいは数ヶ月で時代遅れにしてしまうような技術革新の波に乗せてしまってよいのかという疑問もあった。日進月歩するデジタル技術は両刃の剣であり、保存、利用を飛躍的に推進する側面がある反面、最先端の技術を追い続けると、際限なく媒体と方式の変換を求められて、資金、労力、時間の浪費を余儀なくされる。数百年先を見据えた資料の保存、利用が求められる博物館にとって、使いやすい媒体と方式がいかなるものなのかを模索し続ける必要があった。

他方で、ロシア民族学博物館では手書きの台帳が充実している。しかし東西冷戦の中で、ソ連という国家の情報統制政策とあいまって、1970年代、80年代の間、情報通信技術の発達が阻害され、博物館におけるコンピュータの利用はほとんど手つかずの状態だった。その重要性が認識され、アメリカなど旧西側諸国との比較でその発達の遅れに危機意識を覚え始めるのは、ソ連崩壊前後、すなわち1990年前後である。その後急速に追いつき、常に最新の技術を導入してきた結果、逆にデジタル技術が普及したときには最先端のものを導入することができた。しかし、有する資料台帳の量は膨大で、それをデジタル化する（入力する）だけでも多大な労力を必要とする。そのために、従来手書きで作成されてきた台帳をいかに効率よく、しかも使いやすくデジタル化するのかという問題は、歴史を持つロシアの博物館に特有の問題だった。

さらに民族学資料を博物館資料としてデジタル化して保存、利用しようとする場合に付随する問題として見逃せないのが、

その製作者、所有者、所蔵者、被撮影者などの権利の問題である。デジタル化によってコピーがたやすくなり、しかも質もオリジナル並になってきている今日、この権利の問題はますます重大になってきている。それを規定する知的財産権に関連する国際法、国内法に博物館としていかに対処するのも日ロ共通の課題であった。

この2つのワークショップを通じて、ロシア、日本それぞれの情報のデジタル化に関して、特徴が見えてきた。たとえば、ロシアにおいては中央政府、特に文化関係の省庁が持つ権限が大きいという点を上げることができる。すなわち、データベースのフォーマットを統一することによってロシア全体の博物館、美術館等の文化施設の情報を一元的に管理し、利用に供することに主眼が置かれているように見える。そのような統一フォーマットを持つデータベースが構築されれば、利用者はより単純な操作でロシア内の無数の博物館、美術館の情報やデータを検索し、閲覧することが可能になる。

しかし、それは遠大な計画であり、実現の道はきわめてけわしい。というのは、ロシアには無数の博物館や美術館があり、その性格や設置目的、収蔵される資料も多様で、統一のフォーマットで整理できるものではない。そこに強制的に統一フォーマットを適用すれば、膨大な量の情報が記入されないままになる。その上、博物館の担当の職員は自前のシステムと共に、国が指定するシステムの管理もしなければならず、仕事量が2倍に増える。そのような長所と短所とのバランスをはかりながら、ロシアは全博物館、美術館に共通のデータベースを構築しようとしているようである。

それに対して日本側は現在「クラウド」という方式を採用して、データベースの共用性の向上を目指している。ロシアが情報やデータそのものの保管を各博物館に任せ、その保管形式と検索・閲覧システムの統一を図ろうとしているのに対して、日本側は情報やデータを仮想空間上に設定された保管場所に預け、そこで共有、共用しようとしているといい換えることもできる。この方式だと性格の異なる情報やデータを統一されたフォーマットに無理にはめ直す必要はなく、労力も半減する。しかし、クラウド化された情報やデータのセキュリティの確保、そして著作権などの各種権利の保護などについて最新の施策をとっておかなければならない。

今回のワークショップの結果、日本、ロシアともに博物館の情報やデータの共有、共用については開発途上にあり、フォーマットの統一とクラウド化のいずれが効果的、効率的なのかはまだ判断できない。ただいずれにしても、博物館が有する資料（標本資料、映像音響資料、文献資料など）をできるだけ公開し、検索、閲覧を容易にしようとする方向にあることは確かである。

### ささき しろ

先端人類学研究部教授。専門は文化人類学。特にシベリア、ロシア極東の先住民族の狩猟文化と近現代史の研究。編著に *Human-Nature Relation and Historical-Cultural Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast Asian Forests: Russian Far East and Northeast Japan* (Senri Ethnological Studies 72, 2009)。共編著に『東アジアの民族的世界：境界地域における多文化的状況と相互認識』（有志舎 2011年）など。